

硬式野球クラブに所属する中学生の保護者が考えるベネフィットに関する研究

香川県における中学生の硬式野球クラブに着目して

スポーツクラブマネジメントコース

5023A316-1 竹田 拓司

研究指導教員：間野 義之 教授

1 緒言

少子化や顧問教師の負担増加の影響で一部の運動部活動は持続可能性が危ぶまれており、U15/U18のスポーツ機会の保障という観点から危機に瀕している。そこで、文部科学省は、教員の負担軽減策として休日の部活動を地域に移行する方針を打ち出した。移行先の一つとして期待されているのが、総合型地域スポーツクラブ（以下「総合型クラブ」という）である。しかし、一方で部活動の地域移行による保護者の負担増加が問題視されており、受益者負担の意識をどのように構築していくか議論が行われている。スポーツ庁の調査によると、「会費・参加費など受益者負担による財源確保」を課題として挙げている総合型クラブは44.6%であり財政的な自立の大きな障壁となっている。ところが、香川県では、中学生が対象の単一種目のスポーツクラブである硬式野球クラブが13年間で約10倍（2クラブから19クラブ）に増加している。さらに、これらのクラブの平均月会費は約12,000円と高額（総合型クラブの平均月会費1,100円）である。よって本研究の調査対象は受益者負担意識の高い香川県の硬式野球クラブに所属する選手の保護者（意思決定者を保護者と定義）とし、クラブのどこに価値を見出し、ベネフィットを感じているのかに着目することとした。

2 スポーツクラブのベネフィットについての先行研究

本研究におけるベネフィットは、「硬式野球クラブが提供する有形無形の価値のパッケージ」と定義する。クラブが有している価値（良い指導者が在籍している、

施設・設備が充実しているなど）をまとめてベネフィットと呼び、その価値一つ一つをベネフィット属性と呼ぶこととする。

多くの顧客満足度研究において、Oliverの期待不一致モデルが採用されているため、本研究でも期待不一致尺度を用いてベネフィット属性評価の分析を進める。海外と日本のフィットネスクラブにおける満足度を高める因子として「指導者」「プログラム」「運動効果」「施設・設備」が挙げられた。また、顧客満足度とベネフィットの関係に関する先行研究はフィットネスクラブや総合型クラブが中心であり、単一種目のスポーツクラブに関する研究は見られないことから、部活動の地域移行の研究として新たな知見を導出することができると考えた。

3 研究目的

本研究は硬式野球クラブへ子どもを通わせる保護者の満足度を高めるベネフィット属性を明らかにすることを目的とする。結果として、クラブ側が満足度を効率的に高められるベネフィット属性を把握でき、収益性の改善（会員数増・継続性）に貢献できると考える。よって本研究では2つのリサーチクエスション（RQ）を設定した。

RQ1：満足度に寄与している因子を明らかにする

RQ2：RQ1で明らかになった因子を構成する変数を元に満足度を高めるための具体的な行動を明らかにする

4 研究方法

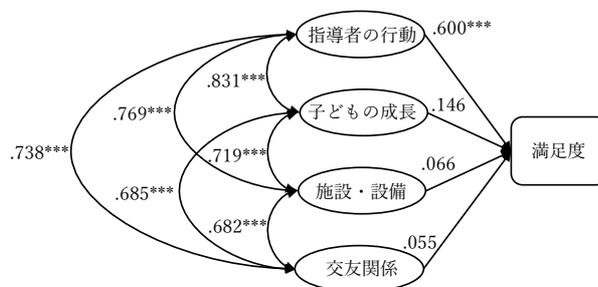
本研究では、香川県に存在する19の硬式野球クラブ、334名の保護者のうち、16クラブと198名の保護者を対象にアンケート調査を行い、保護者の満足度とベネフィット属性評価の関係について検証した。本研究は先行研究を援用し、アンケート調査フォームと属性調査フォームを作成した。また、硬式野球クラブの実情に合わせるため、予備調査を行い質問項目の編集を行った。先行研究と予備調査を元に、「プログラム」「指導者の行動」「子どもの成長」「運営システム」「施設・設備」「交友関係」の6次元、各5項目の30項目の質問を設定した。これらの評価尺度は、現在の期待を評価基準に置いた期待不一致度尺度を用い、5段階リッカート尺度によって評価した。満足度も、5段階リッカート尺度によって評価した。分析は因子分析（最尤法、プロマックス回転）し、得られた因子得点を用いて一元配置分散分析を行なった。また、満足度を従属変数、属性評価4因子を独立変数として重回帰分析を行った。統計パッケージはSPSS Statistics Ver.29を使用した。

5 結果

質問30項目を探索的因子分析にかけた。因子負荷量が0.4未満の項目は分析から除外し、再度因子分析を繰り返した。この方法で5項目を除外した。結果として、4因子25項目に収束した。第1因子10項目を「指導者の行動」、第2因子5項目を「子どもの成長」、第3因子5項目を「施設・設備」、第4因子5項目を「交友関係」と名付けた。

因子分析で算出した属性評価4因子と満足度の相関分析を行なった。4因子でいずれも0.1%水準で有意な相関関係が見られた。一元配置分散分析では4因子全てで0.1%水準の有意差が確認された。「指導者の行動」の因子で低位群と高位群の差が「1.68」と最も差が大

きかった。さらに、満足度を従属変数、属性評価4因子を独立変数として重回帰分析を行った結果、「指導者の行動」で、有意確率0.1%水準、標準化係数 β 0.6を示し、有意に寄与していることが明らかになった。



満足度と4因子の重回帰分析と相関分析の結果

6 結論

本研究ではベネフィット属性評価が満足度に及ぼす影響を一元配置分散分析、相関分析、強制投入法による重回帰分析によって明らかにした。その結果、

(RQ1) 満足度に最も影響を与える因子は「指導者の行動」であることが明らかになった。また、その因子を構成する10項目の変数の中から先行研究で示された3項目に着目し、保護者の満足度を高める指導者の具体的な行動について考察した。具体的な行動として

(RQ2) 「試合や練習において選手に対して安定的に出場機会を与え、子どもの成長を保護者に実感してもらうと共に、選手一人一人を丁寧に観察してコミュニケーションを取り、適切な言葉がけや技術指導を行うことで選手との信頼関係を構築する。なお、不適切行為を断ち、選手と接する際は模範となれるよう心がける。」とまとめることができた。よって本研究は特に単一種目のスポーツクラブにおける保護者の満足度に着目し、起因する要因について理解を深めることができた為、学術および現場への還元の両側面において貢献するものであると言える。